

認知症と病名告知について

川崎幸クリニック院長 杉山 孝博

1. 認知症の告知問題の背景

(1)認知症の人が300万人を超えて、様々な状態、様々な生活背景をもった人たちが認知症と診断されるようになったこと

(2)若年期認知症の人を中心に、ブログや体験発表などをおして、自ら発言する本人が増えてきたこと

(3)早期診断・早期治療により、理解力・判断力がある程度しっかりして、自分の意思を表明できる認知症の人が増えてきたこと

(4)診断の進歩、アルツハイマー型認知症の治療薬の開発、慢性硬膜下血腫・正常圧水頭症など「治る認知症」の知識の普及、専門医・専門医療機関など医療体制の充実などにより認知症が「病気」としてとらえられるようになり、本人・家族にとって受け止めやすくなったこと

(5)治療方法の選択、治療の継続、介護サービス利用、権利擁護に関連した契約行為（預貯金の引き出し・解約など）などの、原則として本人の同意が必要な問題が一般化・社会化したこと

(6)家庭的、社会的、経済的、遺伝的な様々な問題を抱える若年期認知症では、告知無しでは対応できない現実があること

(7)がんをはじめとして、多くの重症や治療困難な疾患においても告知が原則になってきたこと

(8)自分の意思を明確にする世代の増加、成年後見制度、任意後見制度の整備などにより、一人一人の意思が反映されることが重視されるようになってきたこと

2. 認知症の病名告知に関する私の見解と実際

(1)「告知する」「しない」という2者択一の問題ではなく、どのような状態に人に、どのように伝えるかが問題である

(2)「知る権利」「伝える義務」のように大上段にとらえるのではなく、認知症の人にとって、生活・治療・介護をスムーズに続けられるには、どのような情報が必要かを、専門職の立場と、本人の立場に立って考えて提供することが必要である

(3)情報（病名）は生のまま伝えればよいというものではない。受け止める人の思いや能力によって変わってくる

(4)「病名告知は認知症をもった方が、家族や周囲の専門職のサポートのもと、病気と闘っていくうえでのスタートラインにすぎないと考えられます。」（ブログ 若年性アル

ツハイマー病の妻と弥次喜多道中 認知症の告知と告知後について－1 作成日：2009年12月6日 ブログ気持玉3)

(5) どのような年齢であっても、本人に理解力・判断力のある場合や、本人から尋ねてきた場合には、病名を告知する

(6) 病名については、「認知症」「アルツハイマー病」という言葉を使うときもあれば、「物忘れの病気」という言葉を使うときもある。

(7) 「病気でないのになぜ通院するのか」「なぜ薬を飲まないといけないのか」など、治療を継続するために納得させるために、上記の病名や、「もの忘れを進行させないために」という説明をする

(8) 認知症が進行して理解できない人、瞬間的に忘れてしまう人、認知症について恐怖感を抱いている人、病名を知らなくても通院・治療などに差支えない人には原則として告知しない

(9) 仕事や社会生活・家庭生活などに深刻な問題を抱える若年期認知症などでは、病名を告知して、前向きに対応ができるよう援助する

(10) 自動車運転をやめさせるときなどに、「この病気のある人は運転できなくなりました」「この薬を飲んでいて事故を起こした場合、自賠責の保障が受けられない場合があります。もし事故でも起こしたら破産してしまいますから運転をあきらめましょう」などと話すとな得する場合がある

(11) 介護者の検診の付き添いという形で受診した人への説明の仕方は次のとおり。

頭部 CT を見せながら、「CT の検査では脳出血、脳梗塞、脳腫瘍などの大きな病気は見つかりませんでした。よかったですね。でも、この部分（側頭葉）の周りが黒くなっているでしょう。それは側頭葉が萎縮しているからです。側頭葉というのは“記憶の倉庫”に当たります。倉庫が狭くなっているわけです。すると、“記憶の倉庫”はこれまでためた記憶という荷物でいっぱいになって新しい記憶の荷物をしまい込むことが難しくなっているのです。ですから、新しいことが覚えられなくて、昔のことはよく覚えているわけです。これ以上もの忘れが進むと困りますよね。進行をおさえる薬がありますから飲んだらどうですか。それも早くから服用したほうが効果がありますよ。」

このように説明すると本人も家族も十分納得します。本人は、家族の付き添いで来たこともすっかり忘れて、治療することや次回の受診に納得する。

(12) はっきりした病名を言わなくても、診察のたびに、「置き忘れやしまい忘れはありませんか。」「誰でも 50 歳代になると人や物の名前が思い出せなくなって、“あれ”“それ”“こんな形をしたもの”などの代名詞が増えますね。ですからもっと年を取れば当然ですよ」「“もの忘れの名人”になってきたでしょう」「料理をしているとき、電話やトイレなど別のことがあると、料理をしていたことをすっかり忘れて鍋を焦がすことはありませんか？これは、もの忘れの病気の特徴ですよ」などの話をさりげなく話すと、何となく「自分はもの忘れの病気があるんだ」と納得し、深刻に考えないで受け入れられることが極めて多

い。

つまり普段の診療時の会話が重要である。

3. 告知に関する様々な見解

(1) 今井 幸充

日本社会事業大学大学院福祉マネジメント研究科

ポイント：

- 認知症の病名告知は、重度認知症や意識障害、自身の拒否を除いて本人にすべきである。
- 医師自身の理由で患者に告知を行わないのは明らかに説明義務不履行となる。
- 認知症患者の権利や意思・意向を明らかにし、それを守ることが権利擁護の基本である。

出典： **medicina** ISSN 0025-7699 (Print) ISSN 1882-1189 (Online) 44 巻 6 号 (2007.06) P. 1138-1141 「今月の主題 認知症のプライマリケア 認知症の介護と社会支援

病名告知と権利擁護」

(2) ブログ 若年性アルツハイマー病の妻と弥次喜多道中

認知症の告知と告知後について－1

作成日：2009年12月6日 ブログ気持玉3

「告知するか、しないか」ではなく「いかに告知するか」と考えるべきです。認知症の対策が、今までの「ぼけて、なにもわからない本人を抱えて困っている家族」中心から、「認知症になって苦しんでいる患者本人」中心へ移りつつある現在、病名告知は認知症をもった方が、家族や周囲の専門職のサポートのもと、病気と闘っていくうえでのスタートラインにすぎないと考えるべきです。

●告知と告知後について

治癒が不可能な病気の告知に関して何度か話し合ってきましたが、私と妻は同じ考えで告知が基本です。認知症に関しては想定していませんでしたが、当時は同じスタンスでした。若年認知症で早期発見の場合に限って、私は告知をすべきと考えています。早期発見であれば判断力も普通にありますので、これから始まる治療に関しても正直に説明ができます。また、予測される将来のことも前もって妻に聞いておくことも出来ます。どんな病気でも「本人は本当の病名を知る権利」があります。ただし、告知に耐えられないと思われる心理状態の人には告知をすべきではないと考えます。とても大きなダメージを受ける方もいますので配慮が必要と思います。

妻は徐々に増えていく障害をアルツハイマー病が原因であることを知っています。それが

うつ症状になって現れる場合もありますが、告知後の反応としては仕方がないんだと思うことで、ある程度感情のコントロールもできているような気がします。客観的に分析は出来ませんが、病気を今でも自覚しています。

(3) 柳田邦男

『告知とは、単に病名を告げるだけで、あとは患者まかせというのではなく、患者本人に人生を真剣に考えさせ、残された時間をよりよく生きる道を探る機会を与えるものなのだ。

(略)ただ、多くの人にとって、真実を知るとは、一人では耐えられないほどの苦悩を背負うことになるから、医師、看護婦、家族による支えが必要になる。つまり、告知とケアとは、一体のものでなければならない。』(柳田邦男：「死の医学」への序章)

(注：この場合主としてがんの告知についての見解)

(4) 笠間 睦

私は、平成16年7月から8月にかけて、アルツハイマー病患者さんの介護者39名を対象として意識調査を実施しました。

その結果、39名中34名の方が、「自分自身が認知症になった場合に告知を希望する」と回答していました。しかし、患者さん本人に告知されているケースは34名中8名に過ぎませんでした。

えっ？ 自分ならアルツハイマー病であることを告げて欲しいのに、家族には真実を告げられない！ってこと？

結果は、そう出ているんですよ。

詳しいデータは、2004年9月4日付朝日新聞・生活において既に報道されています。記事では触れられていませんが39名の意識調査では、もう1点注目すべき結果が出ています。

告知を希望した34名（常に告知を希望する：27名、初期の場合だけ告知を希望する：7名）の方には、告知を希望する理由をお伺いしております。このアンケート結果は、住田裕子弁護士がアルツハイマー病研究会第11回学術シンポジウムにおいて紹介して下さいました（住田裕子：認知症の告知の問題、老年精神医学雑誌 Vol. 22 138-142 2011）。

告知希望者34名が告知を希望する理由（複数選択可）

1. 純粹に病名は正しく知りたいから	9名
2. 判断力が残されているうちに遺書など残したい	12

	名
3. 進行性に悪化するだけなら、自分の最期を考えたいので	3名
4. その他（自由記載）	0名
5. 1 & 2	6名
6. 1 & 3	1名
7. 1 & 2 & 3	3名

上記アンケート結果にありますように、「告知を希望する理由」として、実に34名中7名の方は、「進行性に悪化するだけなら、自分の最期を考えたいので」という3番の回答を選択しており、アルツハイマー病患者さんを介護する家族の苦悩をうかがい知ることができる数字ですね。

（出典：朝日新聞医療サイト apital より）

【第92回】シリーズ・家族から見た認知症の告知（1）